20040738

厚生労働科学研究費補助金
こころの健康科学研究事業

高機能広汎性発達障害の社会的不適応とその対応に関する研究

平成15年度　研究報告書

平成16（2004）年４月

主任研究者　石井　哲夫

目　　次

Ⅰ．総括研究報告書
高機能広汎性発達障害の社会的不適応と
その対応に関する研究 …… 1
主任研究者　石井哲夫（白梅短期大学・学長）

Ⅱ．分担研究報告書
高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究 …… 13
分担研究者　石井哲夫（白梅短期大学・学長）

高機能広汎性発達障害およびアスペルガー症候群の
神経心理学的特徴に関する研究 …… 16
分担研究者　山崎晃資（東海大学教育研究所・教授）

高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価に関する
研究 …… 22
分担研究者　太田昌孝（東京学芸大学・教授）

高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究 …… 26
分担研究者　須田初枝（社会福祉法人　けやきの郷・理事長）

Ⅲ．研究報告書
高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究 …… 29
石井哲夫（白梅短期大学）
一尾弘志（社会福祉法人　嬉泉）
石橋悦子（社会福祉法人　嬉泉）

高機能広汎性発達障害の就労支援の困難要因の分析
―地域障害者職業センターを対象とした実態調査から― …… 39
辻井正次（中京大学社会学部）

K-SADS-PL・日本語版を用いた
高機能広汎性発達障害の半構造化面接 …… 47
山崎晃資（東海大学教育研究所）

自閉症スペクトル指数日本版（AQ-J）の信頼性・妥当性
およびアスペルガー障害のカットオフ …… 84
栗田　広（東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野）
長田洋和（専修大学法学部）
小山智典（東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野）
宮本有紀（東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野）
金井智恵子（東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野）
志水かおる（信州大学大学院医学研究科精神医学分野）

触法行為を繰り返したアスペルガー症候群の臨床的検討… 94
杉山登志郎（あいち小児保健医療総合センター）

高機能広汎性発達障害児の孤独感と自己理解…… 102
白瀧貞昭、黒田知沙、村上凡子（武庫川女子大学大学院）

高機能広汎性発達障害の幼児における
「一番病」症状の実態調査 …… 121
清水康夫、中村　泉、本田秀夫、今井美保、
日戸由刈、安部真理子、中村　明
（横浜市総合リハビリテーションセンター）

高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価
に関する研究 …… 124
太田昌孝（東京学芸大学）
永井洋子（静岡県立大学）
金生由紀子（北里大学）
佐々木敏宏（ワークセンターけやき）
飯田順三（奈良県立医科大学）
鏡　直子（御茶ノ水発達センター）
清水直治（東洋大学）

高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究 …… 145
須田初枝（社会福祉法人　けやきの郷）
石丸晃子（社会福祉法人　檜の里）
氏田照子（社団法人　日本自閉症協会）
近藤弘子（社会福祉法人　侑愛会）

Ⅳ．研究成果の刊行に関する一覧表…… 169

Ⅰ. 総括研究報告書

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
総括研究報告書

高機能広汎性発達障害の社会的不適応とその対応に関する研究

主任研究者　石井哲夫（白梅学園短期大学・学長）

研究要旨：

自閉症の福祉的援助システムは徐々に整えられつつあるが、その恩恵は知的障害を有するものに限られている。明らかな知的障害がない高機能広汎性発達障害（HPDD）およびアスペルガー症候群（AS）は、その特有な神経心理学的特徴のために日常的な社会生活においてさまざまな軋轢を生じやすく、誤解を受けていじめられ、追いつめられた形で問題行動を突発させることがある。このために本人および家族の苦しみは大きく、時には家庭崩壊に至るケースがあるが、福祉援助の対象とはなり難い。欧米諸国では、「心の理論」に関する研究および画像診断を含む神経心理学的研究が盛んに行われているが、福祉援助システムに関する系統的な研究は未だなされていない。そこで、われわれは、福祉政策上、ほとんど関心が払われていないHPDDおよびASの人々について、①社会的不適応行動の成立機序と神経心理学的特徴を明らかにし、②福祉的援助を受ける際の判定基準を整備し、③家族が抱える諸問題についての調査研究を行うために次の４つの分担研究を行った。HPDDの精神内界の問題が明らかにされれば、医療・教育・福祉の各領域において貴重な資料が得られ、福祉援助システムの構築に多大の貢献をするものと考えている。

【高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究】

今年度の研究においては、初年度からの症例検討から「心理的健康性」に着目した援助発想の展開を試みた。すなわち、３症例が困難な生育経験を経ながらも、なお自立的に社会生活を保っていることに注目し、臨床心理学および福祉心理学的観点からの解析を行った。そして、「心理的健康性の評価」「社会生活へのサポート」「人間関係網の理解と支援」というキーワードに辿り着き、それらを高機能広汎性発達障害の人に関わる支援ポイントの中核をなすものとした。さらに、HPDDの人の就労支援における対応困難度に関する実態調査の結果から、ジョブコーチの有用性や制度上の問題としてHPDDの人たちの障害判定基準の必要性が明らかになった。

【高機能広汎性発達障害およびアスペルガー症候群の神経心理学的特徴に関する研究】

①半構造化面接KIDDIE-SADS-PLの日本語版の作成：The Schedule for Affective Disorders and Schizophrenia for School-Age Children, Present and Lifetime Version（K-SADS- PL）について、注意欠陥／多動性障害、反抗挑戦性障害、行為障害、パニック障害、分離不安障害、回避性障害／社会恐怖、過剰不安障害／全般性不安障害、強迫性障害、うつ病性障害、躁病と、「アンサーシート」の訳出およびBack-Translationを行った。②HPDDおよびASの自己意識の特性の検討：健常群31名、HPDD群７名に一定の質問をしながら、得られた回答が自己概念のどこに分類できるかを検討した。その結果、HPDD児は非常に希薄な主観的自己意識（理解）を有し、そのために自己の確固たるアイデンティを持つことが出来ず、自己の能動

性を意識できない。このことは容易に低い自尊感情につながる。また、客観的自己領域においては、自己の身体とか、他者からの評価などより客観視しやすい特性に依存し、逆に客観視しにくい自己の感情、見解などは軽視するといった特徴を有することが明らかになったのではないかと考えられた。③HPDDにみられる解離性障害の臨床的検討：継続的なfollow-upを行っているHPDDのうち、３歳から41歳（平均年齢9.3±6.0歳）の200名（男性159名、女性41名）ついて、解離性障害の有無についての調査を行った。その結果、HPDDに見られる解離性障害は、解離性障害全体の19％を占めていた。自閉症全体について、意識の変容を解離性障害という視点から見直してみることが必要である。④HPDDの早期徴候の検討：HPDDの早期徴候を把握するために、４歳未満のHPDD児34名（男29名、女５名）と精神遅滞合併PDD（MPDD）児68名（男62名、女６名）で、母親記入のTABSの39項目の該当率を比較した。また高機能自閉症児11名（平均3.7歳、男８名、女３名）と精神遅滞合併自閉症（MA）児77名（平均3.6歳；男68名、女９名）で、専門家評価によるCARS-TVの15項目得点と総得点を比較した。その結果、両尺度の比較で共通して、HPDD児はMPDD児よりも記憶などに関係した認知能力の突出はより著明であり、常同行動はより目立たなかった。⑤幼児期におけるHPDDの発達精神病理学的特徴とそれに基づく早期療育プログラムの開発：５人のHPDDの幼児を対象として、「一番病」に対する療育プログラム（じゃんけんメダル）を行った。その結果、「一番病」の成立機序が次第に明らかになり、今後の早期療育プログラムの在り方に対する示唆を得ることができた。

【高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価に関する研究】

自閉症判定基準α3.2版を用いて、高機能自閉症圏障害（HASD）をもつ成人を対象にして、２つの研究を行った。研究①：処遇上の妥当性と診断的意義：HASDの症例を増やして基礎年金の受給の有無の点から福祉的妥当性を検討し、またトゥレット症候群（TS）を比較対照群として診断的意義を検討した。基礎年金の受給の有無では、症状重症度では自閉症特有の対人関係の障害で、生活制限の程度では職業と生活加算点で、さらに知的発達の遅滞で、有り群が有意に高かった。また、総合判定加算点があり群で有意に高い傾向が見られた。HASDとTSでは、S１からS４までの加算点が両者を診断的に良く区別した。生活制限の程度と知能の構造的障害の２つの尺度でもHASDはTSに対して特徴的なパターンを示した。本判定基準α3.2版がHASDの診断に有用性があり、またHASDの症状と適応の困難を適切に評価していることが示唆された。研究②：判定－再判定による信頼性の検討：おおよそ７ヶ月の期間後に再判定し、α3.2版の信頼性を検討した。対象は11名であり、HASD７名（うち女１名）、TS４名であった。HASDでは、昇進による不安定、福祉的対処の変更などにより、症状の悪化や軽快が見られ信頼性は若干低かったものの、概ね満足すべき信頼性が得られた。α3.2版はHASDの診断に有用性があり、HASDの症状と不適応の特徴を評価しており、かつ信頼性もあり、判定基準として使用できうることが示唆された。

【高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究】

HPDDおよびASのご本人やご家族が抱える問題点を調査し、高機能であるがゆえの生活の困難性への認識を高めるとともに、幼児期から成人期にわたり医療・教育・福祉・労働の各分野における適切な対応と支援の必要性を問うものである。今年度は、アンケート調査により回答が得られた101ケースについて、アンケートの自由回答を解析して問題点をより明確にした。とくに発達支援の重要な課題である「教育」に焦点をあてて検討を行うとともに、

「生活上困っていること」にも焦点をあて、認知・言語・感情・固執・強迫性・ADL・対人関係・社会性・行動障害・その他に分類して本人がもつ困難性の調査を行った。

また昨年度の調査においては、その対象をIQ75以上のHPDDおよびASとしたものの回答の中にはIQ75以下の人たちも含まれていたため、今年度はIQについても限定し（高機能に属さないと思われる３例を除いた）調査票より該当者を抽出し考察を試みた。

分担研究者
山崎晃資　東海大学教育研究所・教授
太田昌孝　東京学芸大学教育学部付属特殊教育研究施設・教授
須田初枝　(福)けやきの郷・理事長

A．研究目的

高機能広汎性発達障害（HPDD）およびアスペルガー症候群（AS）は、一般的にはほとんど知られておらず、さまざまな誤解・偏見・差別に悩まされている。多くの福祉、教育、および精神科医療の関係者も無理解であり、誤った判断をして不適切な対応をしていることがしばしばである。

国際的診断基準（ICD-10およびDSM-Ⅳ）の普及によって、知的障害を有する自閉症の診断・処遇に関する混乱は少なくなったが、HPDDへの福祉施策はこれまでまったくといっていいほどなされておらず、当事者および家族が抱える問題は極めて深刻な状況にある。このため、HPDD児・者の特有な社会的不適応行動を理解し、その対策を樹立することが急務となっていた。

そこで、福祉政策上、不利益を蒙っているHPDDおよびASの人々について、①社会的不適応行動の成立機序と神経心理学的特徴を明らかにし、②福祉的援助を受ける際の判定基準を整備し、③家族が抱える諸問題についての調査研究を３年間にわたって行ってきた。

HPDDおよびASに関する系統的研究は、わが国ではやっとその緒についた段階であり、今後の発達障害の人々に対する福祉施策に多大の貢献をなすものと期待される。同時に、知的障害のないケースの検討から、広汎性発達障害の精神病理学的問題が明らかにされる可能性が大きいものと期待されている。

【分担研究 1：高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究】（分担研究者：石井哲夫）

HPDDの人たちについて、事例を通してその内的世界に迫るために、福祉心理学的視点で、それぞれの実生活の内容を本人と社会のそれぞれの立場にたって、解析した。そして、HPDDの人たちがこの社会の中で暮らしていく上で、必要な精神機能はどのようなものであるのかという観点にたち、その理解と対応についてまとめ、さらに、これを就労支援との関係においても検討した。

【分担研究 2：高機能広汎性発達障害およびアスペルガー症候群の神経心理学的特徴に関する研究】（分担研究者：山崎晃資）

HPDDおよびASは特有な神経心理学的諸問題によって対人関係における葛藤を生じ、社会生活上のさまざまな誤解と軋轢を生じさせることが多い。とくに最近の傾向として、HPDDおよびASの人々による反社会的行動、もしくは犯罪行為が相次いで報道され、あたかもそれは発達障害そのものに起因すると短絡的にとらえられる傾向にある。一方、種々

の生物学的知見が見出されつつある状況の中では、発達障害児・者の療育が客観的な資料に基づく国際レベルの評価に耐え得るものにすることが求められはじめている。そこで客観的な資料に基づく実証的な研究が必要不可欠となってきたのである。

【分担研究 3：高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価に関する研究】（分担研究者：太田昌孝）

本研究の基本目標は、知能の高低や年齢に関わり無く、全ての自閉症児者に対応するものであり、生活の困難さを評定し、それを解決するためのガイドとなる適切な判定基準を作ることにある。とりわけ、現段階における高機能自閉症圏障害児者の不利の是正に焦点をしぼり、自閉症児者が障害に見合った適切な福祉的施策を受けられることを期待するものである。本年度の目的は、この２年間の研究により、自閉症判定基準α3.2版は高機能自閉症圏障害（HASD）の症状と不適応の特徴を適切に評価していることが示唆され、尺度の加算による判定が３尺度からの概括的評価よりは福祉的処遇の手がかりにするのに適していると思われた。本年度はこの結果に基づき、β-版に変更して、広く意見聴取し、福祉的判定としての妥当性について検討することを目的とした。

【分担研究 4：高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究】（分担研究者：須田初枝）

平成10年度から12年度にかけて厚生省心身障害研究「自閉症児・者の不適応行動の評価と療育指導に関する研究」を３年間実施した。その研究のために、日本自閉症協会の会員を対象としてアンケート調査（回答数1,649）を行い、日常生活に困難をきたしているケースを抽出して、聞き取り調査を全国的に実施した。その調査の中に、特に知的に遅れのない高機能自閉症といわれている人々が、日常生活や社会生活において、想像以上の困難な問題を抱えていることが明確になった。知的障害が無いために、福祉的援助や相談機関も無く家庭崩壊寸前のケースも多々あり、この人々の支援体制を緊急に整えなければならないと痛感した。

この問題に対処するために、13年度から15年度までの研究課題を広汎性発達障害の家族課題に関する研究として、医療、教育、福祉等の対策が、どのように成されれば良いのかを纏めることを目的とした研究に取り組んだ。

B．研究方法

【分担研究 1：高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究】

１）本研究で初年度から取り上げている３名の対象者本人および関係者への面接調査を重ね、その人間関係網を整理した。また、別のHPDDの人５名について、定期的に実施しているピアカウンセリングのグループにおける交流記録から、自己・社会認識の内容を検討した。

２）HPDDの人の就労支援における対応困難度に関して、就労支援を担っている地域障害者職業センターの担当者へ質問調査を行い、HPDDに関わる側がどのような困難さを感じているのかについて、実態をまとめた。

【分担研究 2：高機能広汎性発達障害およびアスペルガー症候群の神経心理学的特徴に関する研究】

〈研究 1〉K-SADS-PL・日本語版を用いた高機能広汎性発達障害の半構造化面接（山崎晃資）

HPDDおよびASの診断・評価を可能な限

り客観的に行い、国際的比較研究に耐える研究のための資料を得ることを目的に、"The Schedule for Affective Disorders and Schizophrenia for School-Age Children, Present and Lifetime Version（K-SADS-PL）"（小児期・青年期の感情障害および統合失調症に関する診断スケジュール：生涯ヴァージョン）を訳出し、HPDDの５例について、精神医学的併存症のチェックに有用であるか否かを検討した。

〈研究 2〉K-SADS-PL・自閉性スペクトル指数日本版（AQ-J）の信頼性・妥当性およびアスペルガー障害のカットオフ（栗田　広）

自閉性スペクトル指数（AQ）の日本語版（AQ-J）を作製し、その信頼性と妥当性を検討した。またAQ-JのASに対するカットオフを、AS群（10例）と対照群（72例）で検討した。

〈研究 3〉触法行為を繰り返したアスペルガー症候群の臨床的検討（杉山登志郎）

触法行為を繰り返すHPDD14例の臨床的特徴と治療成果についての検討を行った。

〈研究 4〉高機能広汎性発達障害の孤独感と自己理解（白瀧貞昭）

HPDD児10例と健常対照群30名に半構造化面接を行い、客観的自己と主観的自己に関する質問を行い、得られた回答をそれぞれの領域のカテゴリーとレベルにつて分析した。

〈研究 5〉高機能広汎性発達障害の幼児における「一番病」症状の実態調査】

一番病の発生の実態について、４～６歳のHPDD29例と年齢をつりあわせた知的障害を有する広汎性発達障害（MPDD）33例の母親にアンケート調査を行った。

【分担研究 3：高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価に関する研究】

自閉症協会研究部会部員、児童相談所、知的障害者更生相談所に対して、①HASDの福祉的処遇についての質問紙、②自閉症判定基準β1.0普及版、③GAFやICFの項目などの参考評価表、を送付した。質問紙への回答と普及版を使用して、現在の福祉的判定上に問題のあったHASDの症例についてβ1.0普及版を用いて判定して返送するように依頼した。β1.0普及版は昨年度作成したα版について、少しの手直しをしたものである。GAFは全般的適応度を見るために同時に評価することを依頼した。また、各々の尺度にはICFの対応する項目を併記することにより評価の対象となる行動などについて、評定者間で共通認識ができるように工夫した。

解析に用いた変数としては、β1.0普及版の症状尺度、生活尺度、知能尺度の３つの尺度について、項目の点数を加算して、症状得点（満点36点）、生活得点（満点36点）、知能得点（満点15点）を算出した。自閉症度尺度（自閉度尺度）は症状尺度の内の項目１から項目４までを指しており、それを加算することにより自閉症得点を算出した。症状得点と生活得点を加算したものを症状／生活得点および３つの尺度の得点を加算したものを、症状／生活／知能得点とした。総合判定得点、中間判定得点は付表を用いて判定した。ともに１から５点まで分布した。

GAFについては、広い範囲を指定して付けた回答があったので、その場合には、範囲の中点をGAF得点として採用した。IQについては、田中ビネー検査、鈴木ビネー検査、WAIS-Rがあったが、一括してIQとして採用した。

【分担研究 4：高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究】

20歳以上の前回アンケート調査の回答者に対して再調査した。40名にアンケート調査表を発送した。返送されたものは、33名で82%回収であった。

調査表の項目内容は前回とは異なり、具体的に支援するために、どの様な対策を立てれば良いのかが統計的に出てくるような、内容にしてこれを行政に知的に遅れが無くても、大きな問題を熟知して貰うための資料となるようにまとめた。また、親たちに対しても本人とかかわる時に、心得て欲しいこともまとめた。

【倫理面への配慮】

研究方法を吟味する段階で倫理的検討を要すると考えられた場合には、各施設における倫理審査委員会の審査を受けた。可能な限り本人および保護者から同意を得ることにし、発表に際しては個人が特定できないように配慮した。

C．研究結果と考察

【分担研究 1：高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究】

HPDDの人の日常生活や就労の具体的な場面において、人間関係の多様な展開による自己認識の変化や、生活していく上でのロールプレイングの効用により、「社会性の遅ればせながらの発達」や、「他人に気づかれにくい心理的健康性」などという、新たな福祉心理学的事実を事例の中で認めることができた。

以上のことから、HPDDの人の機能的理解と対応のためのマニュアル作成の基準となる考え方を以下のように示した。

1）機能観をとらえた理解と対応

①本人に対して必要な自己認知を求めることから、過敏な防衛機制を解く

②現実的認知を増やし、自分の課題に取り組むためのための援助

2）人間関係網の理解と活用

①安定した人との関係の構築

②ロールプレイングの活用（他人への共感と言動の一貫性を積極的に探り、求める）

③ピアカウンセリングの導入

また、就労支援担当者に実施した調査から、HPDDの人たちの就労における困難性として、障害特性の理解しにくさや、コミュニケーションの取りにくさ・独自の理屈を主張すること、障害者雇用制度の利用のしにくさがあげられた。また、知的能力の高さが、障害特性の理解にマイナスに作用していること、そして、障害受容の難しさの問題があげられた。一方で、「真面目さ」や「出勤の安定性」は就労上のメリットとしてあげられ、マッチする仕事がある場合は、その高い能力や認知特性が評価されることも示された。これらのことから、ジョブコーチの有用性や制度の上の問題として、HPDDの人たちの障害判定基準の必要性が明らかになった。

【分担研究 2：高機能広汎性発達障害およびアスペルガー症候群の神経心理学的特徴に関する研究】

〈研究 1〉K-SADS-PL・日本語版を用いた高機能広汎性発達障害の半構造化面接

①K-SADS-PL・日本語版は、本来、6～18歳の子どもの精神病理学的エピソードについて、現在と過去にわたって、DSM-Ⅲ-RおよびDSM-Ⅳの診断基準に準じて診断分類を明確にするようにデザインされた半構造化面接評価尺度であるが、今回は、DSM-Ⅳの診断基準のみを採用した。われわれの経験から

は19歳以上でも十分に使用し得ることが明らかになった。②チェック項目からのみ評価すると、AD/HD、うつ病性障害、強迫性障害などといえるが、反応の仕方を吟味すると、HPDDに特有な反応が見られ、特定の疾患が併存していると判断するには、その後の臨床経過を慎重に検討する必要がある。③児童期・思春期の症例で、親と本人の両方でチェックすると評価に差異が見られることがある。この差異を吟味することによってHPDD児・者の特徴が浮き彫りになり、親の本人に対する理解を深めることができる。

〈研究 2〉自閉性スペクトル指数日本版（AQ-J）の信頼性・妥当性およびアスペルガー障害のカットオフ

①HPDD群は、AD/HD群および対照群よりCARS-TV総得点が有意に高く、TB検査の「理解」でAD/HD群より有意に合格率が低かった。②乖離は、HPDD群とAD/HD群で有意差はなく、両群とも対照群より有意に大きかった。③HPDD群とAD/HD群で、認知機能に一定の共通性が認められた。④HPDD群はMPDD群より「記憶」に関係した認知能力が著明であり、常同行動は目立たず、この特徴は、高機能となるPDD幼児の早期徴候となる可能性があった。⑤AQ-Jの内部一貫性と再現性は高く、信頼性と妥当性が認められた。⑥AQ-Jの得点が30点未満の人はASの可能性が低く、30点以上の人では可能性があることが示唆された。④AS診断と関連する16項目からなる短縮版（AQ-J-16）も、AQ-Jと共にASスクリーニングに有用であることが明らかになった。

〈研究 3〉触法行為を繰り返したアスペルガー症候群の臨床的検討

①HPDDの10.2%で精神病様症状がみられ、被害念慮・妄想が多く、いじめられ体験に起因すると考えられた。②HPDDの7.5%に解離性障害が認められ、外傷体験との関連が示唆された。③HPDDの触法行為は、万引き、金銭の持ち出し、恐喝、強制猥褻、ストーカー行為などであった。④衝動コントロールには少量の抗精神病薬が、フラッシュバックの抑制にはSSRIが有効であった。⑤継続的な相談を受けてきた例では、触法行為に対する治療的介入が有効であり、再犯率が低かった。

〈研究 4〉高機能広汎性発達障害の孤独感と自己理解

①HPDDの人は主体的に自己概念を持つことが困難で、他者の見解で代用していた。②低い段階の認識（知覚・直感的）しか持たず、具体的事物に対する認知とのアンバランスさが著明であった。

〈研究 5〉高機能広汎性発達障害の幼児における「一番病」症状の実態調査】

①HPDD幼児は限局した興味にとらわれやすく、勝敗の要素に形式的に引きずられる傾向がみられた。②HPDD幼児では一番病の発生率が高く、4歳からみられた。③一番病が生じると、大泣き・憤激・相手への妨害などが集団活動を妨げた。

【分担研究 3：高機能広汎性発達障害の社会的不適応の評価に関する研究】

①普及版（β1）は、IQにウエイトがかか知的障害の判定法とは異なり、症状の重症度、生活の制限、知能の構造的障害の3尺度によって判定の適切性が確保された。②HPDDでは、療育手帳のサービスが適切とはいい難い。③サービスの適切さを保障するためには、判定者に対する啓発が必要である。④療育手帳と精神障害者手帳に自閉症特有のニーズにも対応できるサービスをつけるか、「自閉症・発達障害手帳」を作ることが必要

である。

【分担研究 4：高機能広汎性発達障害の家族課題に関する研究】

①年齢や知的能力にかかわらず、こだわりやイライラが頻発し、フラッシュバックが生活に大きな影響を与えている。②家族は当事者への過大な期待から脱却し、現実を見つめて生活の再構築をする必要がある。③知的能力に相応した生活スキルが獲得されていない。④企業のHPDDについての理解が乏しく、些細な出来事をきっかけにトラブルが生じる例が多くみられた。⑤ジョブコーチの配置が必要である。

D．研究発表

1．論文発表

Ando, H.， Yamamoto, K.， Ichimura, A.， Sato, S.， Teraoka, N.， Ozono, H.， Kushino, N.， Maruyama, M.， Matsumoto, H.， Yamazaki, K.：Early crisis intervention to patients with acute stress disorder in general hospital. Tokai J. Exp. Clin. Med. 28；27～33, 2003年.

Hata, K.， Iida, J.， Iwasaka, H.， Negoro, H.， Ueda, F.， Kishimoto, T.：Minor physical anomalies in childhood and adolescent onset schizophrenia. Psychiatry and Clinical Neurosciences 57；17～21, 2003年.

Hata, K.， Iida, J.， Iwasaka, H.， Negoro, H.， Kishimoto, T.：Association between minor physical anomalies and lateral ventricular enlargement in childhood and adolescent onset schizophrenia. Acta Psychitrica Scandinavica 108；147～151, 2003年.

Honda, H. & Shimizu, Y.：Early intervention system for preschool children with autism in the community：the DISCOVERY approach in Yokohama, Japan. Autism 6；239～257, 2002年.

Iida, J.， Kadouchi, K.， Yamauchi, T.， Inada, N.， Negoro, H.， Kishimoto, T.：Conspicuous borderline mentality in a 10-year-old girl with anorexia nervosa. Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry 43；Supplement, 33～43, 2002年.

飯田順三：性の発達と方向づけに関連した心理および行動の障害．精神医学症候群Ⅱ 別冊日本臨床、領域別症候群 39；327～330、2003年.

飯田順三：注意欠陥／多動性の薬物療法．児童青年精神医学とその近接領域 44；347～353、2003年.

石井哲夫：高機能自閉症への社会的支援．自閉症スペクトラム研究 2；31～35、2003年.

石井哲夫：高機能自閉症から学ぶ．エスペランサ 3；5～7、2003年.

石島路子、蓑輪 巌、染谷利一、栗田 広、加藤進昌：アスペルガー症候群と診断された一卵性双生児一致例での詳細な比較検討．臨床精神医学 32；1365～1375、2003年.

井筒 節、加藤星花、長田洋和、栗田 広：広汎性発達障害（PDD）児とPDD非合併精神遅滞児の継続的発達変化の比較．臨床精神医学 33；65～69、2004年.

Kamei, M.， Miyatake, K.， Hattori, R.， Tanaka, T.， Oikawa, M.， Some, S.， Hirayama, Y. & Ohta, M.：Cognitive developmental group therapy for persons with severe motor and intellectual disabilities (SMID) by Ohta Staging. 16th Asian Conference on Mental Retardation Proceedings, 287～296, 2003年.

Kanai, C.， Koyama, T.， Kato, S.， Miyamoto, Y.， Osada, H. & Kurita, H.：A comparson of highfunctioning atypical autism and child-

hood autism by Childhood Autism Rating Scale-Tokyo Version. Psychiatry and Clinical Neuroscineces (in press).

加藤星花、井筒　節、金井智恵子、小山智典、宮本有紀、栗田　広：描画版ユースセルフレポート問題行動尺度（P-YSR-P）の信頼性と妥当性．臨床精神医学　32；1563～1569、2003年．

小坂　淳、飯田順三、吉岡　玲、南雄吉郎、南　公俊、龍田　浩、根来秀樹、岸本年史：家庭内暴力を伴ったひきこもりに対してfluvoxamineが著効した1例．奈良医学雑誌　54；231～236、2003年．

小山智典、立森久照、長田洋和、戸張美佳、石田博美、栗田　広：WISC-Ⅲによる高機能広汎性発達障害と注意欠陥／多動性障害の認知プロフィールの比較．精神医学　45；809～815、2003年．

小山智典、立森久照、長田洋和、戸張美佳、志水かおる、武田俊信、栗田　広：広汎性発達障害児の発達評価における発達指数（DQ）の臨床的意義．臨床精神医学　32；1081～1087、2003年．

栗田　広、長田洋和、小山智典、宮本有紀、金井智恵子、志水かおる：自閉症スペクトル指数日本版（AQ-J）の信頼性と妥当性．臨床精神医学　32；235～1240、2003年．

栗田　広、長田洋和、小山智典、金井智恵子、宮本有紀、志水かおる：自閉性スペクトル指数日本版（AQ-J）のアスペルガー障害に対するカットオフ．臨床精神医学（印刷中）．

Kurita, H., Osada, H., Shimizu, K. & Tachimori, H.：Bipolar disorders in mentally retarded persons with pervasive developmental disorders. Journal of Developemental and Physical Disabilities (in press).

Kurita, H., Osada, H. & Miyake, Y.：External validity of childhood disintegrative disorder in conparison with autistic disorder. Journal of Autism and Developemental Disorders (in press).

Mutoh, N., Suzuki, H., Kano, Y., Nagai, Y. & Ohta, M.：Ohta Staging：Evaluation system of cognitive development for persons with autism spectrum disorder. 16th Asian Conference on Mental Retardation Proceedings, pp. 353～361, 2003年．

根来秀樹、姜　昌勲、岸本年史、飯田順三：自閉症のこだわりに基づく自傷・他害行為にfluvoxamineが有効であった1例．新薬と臨床　52；1525～1528、2003年．

太田昌孝：自閉症圏障害における実行機能．自閉症と発達障害の進歩　7；3～25、2003年．

太田昌孝：認知発達のプログラムから．そだちの科学　創刊1号；59～65、2003年．

太田昌孝：ICFと発達障害―活動と参加に焦点を当てて―．精神医学　45；1175～1184、2003年．

清水康夫、本田秀夫、日戸由刈：AD/HDの心理社会的治療―教育との連携、教師への支援―．精神科治療学　17；189～197、2002年．

清水康夫：自閉症スペクトル障害の早期介入．精神科治療学　18；987～993、2003年．

清水康夫：自閉症の早期介入の動向．心を開く　31号；71～75、2003年．

志水かおる、長田洋和、中野知子、渡辺友香、栗田　広：広汎性発達障害（PDD）と注意欠陥／多動性障害（AD/HD）における人物画描画能力の比較．精神医学　45；1305～1569、2003年．

杉山登志郎、海野千畝子、浅井朋子：高機能広汎性発達障害に見られる解離性障害の臨床的検討．小児の精神と神経　43；113～120、2003年．

杉山登志郎：自閉症文化に沿った自閉症スペクトラムへの教育．発達の遅れと教育558；10～12、2003年．

杉山登志郎：高機能広汎性発達障害に見られる行為障害と犯罪．そだちの科学　創刊1号；42～46、2003年.

杉山登志郎：動き出した特別支援教育―子ども達の教育に求められているもの．特別支援教育　11；4～9、2003年.

辻井正次：軽度発達障害の就労支援の実際と課題．小児の精神と神経　43（3・4）；205～212、2003年.

内田裕之、辻井正次：高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応(1)：Ⅰ図版の特性との関連．中京大学社会学紀要　17；95～111、2003年.

山崎晃資、白瀧貞昭、松本秀夫、橋本大彦：自閉症はどこまでわかったか．最新精神医学　8；231～243、2003年.

山崎晃資：精神遅滞と精神医学的合併症．別冊・日本臨床・領域別症候群シリーズ・精神医学症候群Ⅱ　39号；476～479、2003年.

山崎晃資：自閉症．別冊・日本臨床・領域別症候群シリーズ・精神医学症候群Ⅱ　39号；517～520、2003年.

山崎晃資：自閉症児の内的世界にどこまで近づけるか．そだちの科学　創刊1号；120～122、2003年.

山崎晃資：学校保健にかかわる専門相談医のありかた―児童精神科医の立場から．日本医師会雑誌　130；541～546、2003年.

山崎晃資：解説：高木隆郎著・学校恐怖症の典型像（Ⅰ）．こころの臨床　22；52～54、2003年.

山崎晃資：注意欠陥／多動性障害（AD/HD）の薬物療法．精神科　3；252～258、2003年.

山崎晃資：医師として自閉症教育に期待すること．発達の遅れと教育　558号；7～9、2003年.

2．著書

飯田順三：精神医学的障害．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・斎藤万比古・北　道子編）、じほう、東京、pp.99～104、2003年.

飯田順三：AD/HDと不安障害．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・斎藤万比古・北　道子編）、じほう、東京、pp.131～133、2003.

飯田順三：特別な教育的支援を必要としている子どもたち．高機能自閉症（アスペルガー障害）―理解・啓発ガイドブック―（奈良県教育研究所編）、2003年.

飯田順三：こころの気がかり相談室―思春期編―．こころの気がかり相談室、朝日新聞社、東京、pp.68～100、2003年.

栗田　広、立森久照、長田洋和：高機能広汎性発達障害とAD/HD．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・齋藤万比古編）、じほう、東京、pp.87～92、2003年.

太田昌孝：発達障害児への教育的訓練．総編集松下正明：新世紀の精神科的治療（担当編集：武田雅俊）．第6巻・認知科学と臨床、中山書店、pp.287～302、2003年.

太田昌孝：どうサポートするか．日本トゥレット（チック）協会編：チックをする子にはわけがある．大月書店、pp.68～84、2003年.

太田昌孝：児童虐待．子どものストレス（江川玟成・高橋　勝・葉養正明・望月重信編著）、教育キーワード137・第10版、時事通信社、pp.223～224、pp.270～271、2003年.

清水康夫：心理社会的治療の基本的な考え方．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・齋藤万比古編）、じほう、東京、pp.208～212、2003年.

清水康夫、井上とも子：学校における指導―

情緒障害通級指導教室を中心に―．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・齋藤万比古・北道子編）、じほう、東京、pp. 208～212、2003年.

清水康夫、本田英夫：医療機関と学校とのネットワーク．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・齋藤万比古・北　道子編）、じほう、東京、pp. 213～215、2003年.

杉山登志郎：特別支援教育と小児精神医学高機能広汎性発達障害など．特別支援教育のための精神・神経医学（杉山登志郎・原仁編）、学研、東京、pp. 6～39、56～92、140～154、164～174、200～203、2003年.

杉山登志郎：学齢期青年期の自閉症と性行動学齢期青年期の問題行動への対応．自閉症ガイドブックⅡ（石井哲夫編）、日本自閉症協会、東京、88～90、2003年.

杉山登志郎：解説．森口奈緒美と「変光星」．変光星（森口奈緒美著）、花風社、東京、pp. 329～333、2004年.

Thomsen, P. H. & Kurita, H.：International perspective. Pediatric Psychopharmacology (Ed. by Scahill, L., Charney, D. S. & Leckman, J. F.), Oxford University Press, Oxford, pp. 746～755, 2003年.

蔦森武夫、清水康夫：実践講座「精神発達リハビリテーション」第２回：親がこどもの障害に気づくとき―障害の告知と療育への動機づけ―？．29；143～148、2001年.

山崎晃資、小石誠二：自閉症、注意欠陥／多動性障害、チックの薬物療法．臨床精神薬理ハンドブック（樋口輝彦・小山　司・神庭重信編）、医学書院、東京、pp. 278～291、2003年.

山崎晃資：標準化された評価尺度の利用．注意欠陥／多動性障害―AD/HD―の診断・治療ガイドライン（上林靖子・斎藤万比古・北　道子編）、じほう、東京、pp. 46～54、2003年.

山崎晃資：統合失調症、強迫性障害、外傷後ストレス障害、摂食障害、睡眠障害、自閉症、注意欠陥／多動性障害、不登校、習癖異常、遺尿症．病弱教育Q&A　PartⅤ（西間馨三・横田雅史編）、ジアース教育新社、東京、pp. 124～155、162～194、2003年.

３．学会発表

日戸由刈、清水康夫、本田秀夫、萬木はるか：４つのジュースからどれを選ぶ？：アスペルガー症候群の学童に「合意すること」を集団で学ばせる．第89回日本小児精神神経学会、静岡、2003年６月27日.

日戸由刈、清水康夫、本田秀夫、萬木はるか：アスペルガー症候群の‘COSST’プログラム―社会不適応と生活破綻への予防的介入―．第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年10月23日.

本田秀夫、清水康夫、今井美保、日戸由刈、小澤武司、志賀啓子：発達障害を高感度・高特異度に早期発見する―YACHT-18を用いたシリアル・スクリーニング方式―．第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年10月24日.

姜　昌勲、飯田順三、根来秀樹、岩坂英巳、岸本年史：注意欠陥／多動性障害における症状重症度と事象関連電位との関連性．第99回日本精神神経学会総会、東京、2003年.

姜　昌勲、飯田順三、根来秀樹、岩坂英巳、岸本年史：AD/HD児における事象関連電位と症状重症度との関連性について．第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年.

金生由紀子、太田昌孝：トゥレット症候群成人の行動表現型．第25回日本生物学的精神医学会、金沢、2003年.

金生由紀子、太田昌孝、新井　卓、永井洋子：怒り発作から見た“高機能”発達障害における攻撃性．第44回日本児童青年期精神

医学会、福岡、2003年.

Kano, Y. and Ohta, M. : Three outcome groups of adults patients with Tourette syndrome in Japan. 3rd Congress of the Asian Society for Child Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Taipei, Taiwan, 2003年.

金生由紀子、太田昌孝：トゥレット症候群成人の臨床特徴. 第10回トゥレット研究会、福岡、2003年.

細金奈奈、斎藤万比古、佐藤至子、渡部京太、今井淳子、笠原麻里、飯田順三、原田　謙、上林靖子：注意欠陥／多動性障害の子どもの予後に影響を及ぼす要因について. 第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年.

岩坂英巳、飯田順三、笹川宏樹、清水千弘、根来秀樹、姜　昌勲、岸本年史：Adult AD/HDを疑って受診した患者の臨床的特徴—診断と治療の困難さにどう立ち向かうか—. 第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年.

根来秀樹、飯田順三、岩坂英巳、姜　昌勲、岸本年史：AD/HDの鑑別診断における事象関連電位の有用性の検討（予備的研究）. 第99回日本精神神経学会総会、東京、2003年.

根来秀樹、飯田順三、姜　昌勲、岩坂英巳、岸本年史：注意欠陥／多動性障害の補助診断としての事象関連電位について（第一報）、第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年.

Negoro, H., Iida, J., Iwasaka, H., Kyoh, M., Kishino, K., Kishimoto, T. : Event-related potentials in adult with attention deficit/hyperactivity disorder. The 3rd Congress of the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Taipei, Taiwan, 2003年.

小澤武司、大塚由美子、本田秀夫、清水康夫：高機能広汎性発達障害の早期発見から早期療育に至る経路の保障. 第43回日本児童青年精神医学会、東京、2002年.

Shirataki, S. : Is Asperger syndrome different from high-functioning autism in respect to neuropsychological functioning? 3rd Congress of the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Pro-fessions. Taipei, Taiwan, 2003年.

白瀧貞昭：医療の立場から（シンポジウム「高機能広汎性発達障害への特別支援教育をめぐって」). 第８回発達障害療育研究会、東京、2004年.

笹川宏樹、岩坂英巳、清水千弘、飯田順三、大西貴子、岸本年史：注意欠陥／多動性障害（AD/HD）への社会的スキル訓練（SST）とその効果について. 第44回日本児童青年精神医学会、福岡、2003年.

米田衆介、金生由紀子、相沢幸子、鏡　直子、式場典子、市川宏伸、永井洋子、太田昌孝：国内における広汎性発達障害の医療状況に関する実態調査. 第44回日本児童青年期精神医学会、福岡、2003年.

Ⅱ. 分担研究報告書

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
分担研究報告書

高機能広汎性発達障害の行動理解と援助に関する研究

主任研究者　石井哲夫（白梅学園短期大学・学長）

研究要旨：本研究は、高機能広汎性発達障害（以下HPDD）の行動を福祉心理学の立場から理解し、援助に必要な基準を考察したものである。最近、HPDDについて、社会的に注目され、関心も高まってきているが、現段階ではHPDDの人たちに対する社会の人々の理解の仕方は不十分であり、その不適切な対応により、障害特性からくる生活上の困難さがますます強められているのが実態である。

我々は、HPDDの人たちと具体的に関わってきた経過の中で、この人たちそれぞれに、人間として生きるために基本的に必要とされる心理機能（心理的健康性）が存在することを認めることができた。特に、人間関係のあり方によって、障害共感を抱く関係の交流や、生活経験を通して獲得した必要な人たちとの結びつき（人間関係網）等が、生活の基盤となることがわかってきた。このことから、必要な人間関係を多様に形成していく関わりの基準を考察することができた。

また、日常生活における困難な事態を本人自らが対応したり、ジョブコーチなどの援助者のあり方を考える上においても、本人の生活の仕方をより適切に決めていくための援助法が実践例を通して明らかになった。すなわち、本人の心理的機能に着目し、教育や就労における必要な教示を行うための有効な基準として、援助実践の場に必要な援助マニュアルを作成することが可能になった。

研究協力者
辻井正次　中京大学社会学部助教授
一尾弘志　社会福祉法人嬉泉
石橋悦子　社会福祉法人嬉泉

A．研究目的

HPDDの人たちについて、事例を通してその内的世界に迫るために、福祉心理学的視点で、それぞれの実生活の内容を本人と社会のそれぞれの立場にたって、解析した。そして、HPDDの人たちがこの社会の中で暮らしていく上で、必要な精神機能はどのようなものであるかという観点にたち、その理解と対応についてまとめ、さらに、これを就労支援との関係においても検討した。

B．研究方法

1）本研究で初年度から取り上げている3名の対象者本人および関係者への面接調査を重ね、その人間関係網を整理した。また、別のHPDDの人5名について、定期的に実施しているピアカウンセリングのグループにおける交流記録から、自己・社会認識の内容を検討した。

2）HPDDの人の就労支援における対応困難度に関して、就労支援を担っている地域障害者職業センターの担当者へ質問調査を行い、HPDDに関わる側がどのような困難さを感じているのかについて、実態をまとめた。

C．研究結果

HPDDの人の日常生活や就労の具体的な場面において、人間関係の多様な展開による自己認識の変化や、生活していく上でのロールプレイングの効用により、「社会性の遅ればせながらの発達」や、他人に気づかれにくい心理的健康性などという、新たな福祉心理学的事実を事例の中で認めることができた。

以上のことから、HPDDの人の機能的理解と対応のためのマニュアル作成の基準となる考え方を以下のように示した。

1）機能観をとらえた理解と対応

①本人に対して必要な自己認知を求めることから、過敏な防衛機制を解く

②現実的認知を増やし、自分の課題に取り組むためのための援助

2）人間関係網の理解と活用

①安定した人との関係の構築

②ロールプレイングの活用（他人への共感と言動の一貫性を積極的に探り、求める）

③ピアカウンセリングの導入

また、就労支援担当者に実施した調査から、HPDDの人たちの就労における困難性として、障害特性の理解しにくさや、コミュニケーションの取りにくさ・独自の理屈を主張すること、障害者雇用制度の利用のしにくさがあげられた。また、知的能力の高さが、障害特性の理解にマイナスに作用していること、そして、障害受容の難しさの問題があげられた。一方で、「真面目さ」や「出勤の安定性」は就労上のメリットとしてあげられ、マッチする仕事がある場合は、その高い能力や認知特性が評価されることも示された。これらのことから、ジョブコーチの有用性や制度の上の問題として、HPDDの人たちの障害判定基準の必要性が明らかになった。

D．考察

本研究は、まだ緒についたという段階である。その理由として、これまでHPDDの人については、その心理的に不健康な状況に周囲が振り回され、援助者側がどう理解し対応すべきなのかが明確にされていなかったと言える。

HPDDの人の実態として、家族との関係さえも疎遠になりかねないことから、社会的に孤立し、ミスマッチに本人が悩み、傷ついているということを、本人たちの発言からあらためて知ることとなった。また、就労支援担当者による支援上の困難性も当然ながら明らかになった。

したがって、機能観からもたらされるHPDDの人たちそれぞれの心理的健康性それに関連する人間関係網の内容から、あらたな基準による援助マニュアルを作成することが可能になった。

E．研究発表

1．学会発表

渡辺陽子、辻井正次：高機能広汎性発達障害青年の友人関係に関する発達臨床的検討．第89回日本小児精神神経学会大会．

堀美和子、辻井正次：高機能広汎性発達障害児の民間NPOによる地域発達支援システムの試み(1)―愛知県西三河地区での実践例．第90回日本小児精神神経学会大会．

大場美華、辻井正次：高機能広汎性発達障害児の民間NPOによる地域発達支援システムの試み(2)―愛知県西三河地区での実践例．

第90回日本小児精神神経学会大会.

2．論文発表

石井哲夫：高機能自閉症への社会的支援．自閉症スペクトラム研究　2；31～35、2003年.

石井哲夫：高機能自閉症から学ぶ．エスペランサ　3；5～7、2003年.

辻井正次：軽度発達障害の就労支援の実際と課題．小児の精神と神経　43（3・4）；205～212、2003年.

内田裕之、辻井正次：高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応(1)：Ⅰ図版の特性との関連．中京大学社会学紀要　17；95～111、2003年.